
そうだ。バトスピで食べよう。

ダ・かーね。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そうだ。バトスピで食べよう。

【Zコード】

Z6561Y

【作者名】

ダ・かーね。

【あらすじ】

異界の存在発見と同時に、地球へ伝来したバトルスピリッツ。

これによりバトルスピリッツ、プロハイランカーリーグが発足してから30年。

以前から高級ブランドで名を馳せ、今ではバトルフォームファッショングやカードスリーブの特許権すら持つ“レイ・ロレンツオ”社。

そのお抱えのプロハイランカー“松風アリサ”。

これは松風アリサのカードバトラー人生を描いた物語である。

この作品は“バトルスピリッツ一次創作”です。

不定期更新に加え、駄文になりますが、よろしくお願いします。

では申し訳程度に、「ゲートオープン！界放オオオッ！」

プロローグ～私塾、松風BS塾～

全窓の側面から、光が射し込む教室がある。

二人も座れば、埋まつてしまいそうな長卓が二列、四つずつならべられた教室だ。

今にもビルの谷間に飲まれ、夜闇を呼び込むだろう陽光を浴びる教室には、幾つかの人影。

四人の若い男性が屯し、ガヤガヤ騒いでいるかと思えば、その後ろの席では老夫婦が小さな声で話をしていたり、最後列にはブレザーの制服を凜と着こなす女子高生の姿が見受けられる、実に奇妙な教室だ。

やがて、陽光が墜ち、自動で電灯の白い明かりが教室を照らす頃、

「やあ、皆揃つてるか？」

全窓とは逆の位置に設置された引戸を明け、新たに銀色が射し込んだ。

“塾”教師、松風アリサ。

アリサは腰まで伸びた銀髪を振り、七人の姿を確認すると両手を“高く”伸ばして、紙袋を教卓の上に置いた。

ふつ、と一息、

「全員揃ってるな。なら、始めるといよ。さて、先週に出して
いた宿題だが、」

言いながら流し田で四人の男性を睨みつけるアリサの眼力に、

「 げつ」

口を揃える四人に呆れたアリサが、

「お前達に出したような宿題だというのに…。里村夫婦と櫻井を見
るー毎週きつちつと出しているところに、お前達は 」

「まあまあ…、先生。わしら老いたモンは、時間があるがよって、
宿題ができりますが…、若者は多忙であります故、何卒…」

四人に怒鳴るアリサを、まるで孫をあやすように諫めようと里村夫
が声を出すと、里村妻が「ですじや…」と頷く。

「む…、あなた方にそいつ言われると、辛い…」

すると、小さな頬を膨らませ、ふて腐れるように俯いたアリサを見て、

「ロリサテラエロス！」

四人組の一人、眼鏡をかけた、肥満体型の藤山が立ち上がるなり噴血。

白化して朽ち果てると、仲間に叩かれて意識を取り戻す。

「藤山よ。お前はエロゲのエロシーンに突入するまでに、パンチラで果てるような男だつたのか？違うだろ！？俺達のヘブンズゲートは、まだ開かれちゃすらいねーんだぜ？」

「 つ！？ありがとう久慈！俺、頑張れるよ！」

「相変わらず、お前達の話はわからん」

アリサが顔をあげる。

すると、田に入ったのは、嫌悪感を隠そつともしない表情の櫻井だ。

以前、藤山の後ろに座る三屋に「黒髪ロング萌え」と呴かれて以来、髪をポニーtailに縛り上げ、最後列を陣取っている彼女に、アリサは手招きをする。

「櫻井、前に来たらどうだ？」

「結構です」

アリサの誘いを断つた櫻井は、ツイとそっぽを向いてしまつ。

「まー、出席してるだけマシか。成績も悪くないからな。

紙袋を横に倒して取り出した出欠表に、アリサはチェックをつけていく。

「さて、お前達のため（ひいては、読者に世界観を把握してもらいつため）に、今日は世界の現状を説明してもらおうか。 藤山」

「ほいぞ」

待つてましたと、贅肉を揺らし藤山が立つ。

入塾の際に購入した教材のページを開き、一息。

あー、あー、と喉の調子を確認した後、口腔を広げた。

「バトルスピリッツ それはカードとコアを駆使し

「ああ、その項は構わん。2099年から年代を追ってくれれば良

い

藤山の発するテノールボイスを押し退け、アリサのソプラノが指示する。

沈黙。

「…言ひ声でも、ダメっすか?」

「ああ」

即答。

残念そうに酸っぱい顔を作った藤山が、渋々年表を読み上げる。

2099年

異界の存在が発覚。

と同時に、異界の秩序とも言える“バトルスピリツ”が地球に伝来。

「そうだな。2060年頃に騒がれていた、時間移動の正体が実は、異界へのゲートを開く、ということになっていたな。未だタイムマシンは完成してないわけだが…」

苦笑、咳払いの動作の流れを済ませると、藤山に続きを促す。

同年

娯楽としてのバトルスピリッツが普及する。それに伴い、異界人との交流も盛んになる。

「質問ですじゃ」

「どうぞ」

拳手したのは里村夫だ。

「異界人と交流が盛んになる、と言つとりますが先生…。わしらの生活は、余り変わつとらんのじやが…」

「異文化に触れ、取り入れることによる生活の変化を感じられない、ということか。いい質問だ。答えはこうだ。『異界独特の文化は、地球の文化のいすれかに該当する』」

一同がどよめく。

「異界の文化には、明らかに我々人間の手が加えられていたんだ。調査隊の調べで、『異界王』というキーワードが浮かび上がった。今は故人らしいが、異界の文明を築き上げたのは、間違いない異界

王だろうな。意図的にか偶然かは別として、異界王が地球から異界へ渡つた人間だというのは、間違いないだろう。即ち、異界の文化は地球ベースに組み上げられた物といえる。異界の特産といえばバトルスピリッツくらいなものだろうな」「

おおお、歓声をあげる一同に赤面が悟られぬよう、授業の準備を進めるフリをして、アリサは教卓に隠れる。

「ふ、藤山。続ける」

「おーーっす」

2103年

地球側でもバトルフィールドの構築が可能に。これによりバトルスピリッツは、娯楽とスポーツの一両面性を持つようになる。

「これは皆も知つての通りだな。特にプロハイランカーの登場により、バトルスピリッツはスポーツとしての面がより強くなつただろうな。野球チームが企業と契約しているように、プロハイランカーにも企業と契約し、それを生業とする者もいる。当然、これはバトルフィールドの登場により“やるバースピ”だけでなく“見るバースピ”というジャンルが生まれたからだが

一通り語り終えたアリサが、顎で藤山に次を促す。

それよりも早く、久慈の一つ後ろに座る赤沢の、

「先生、他人事じやないつすよね。今年度プロリーグ暫定4位、トッップクラスハイランカーの一人、松風アリサなんつすから」

といつ言葉にアリサは、少し面食らつた顔をする。

塾の講師としては適切な物言いだと判断したのだったが、なるほど、次回からは話せる範囲で“私”を絡めてゆけ。

決意したアリサが頷いていると、ふと先の言葉に引っ掛かる。

「ちょっと待て。暫定4位、と言つたのか？」

おかしい、昨晩の連絡ではまだ暫定3位に残っていたはずだ。

慌てて記憶を掘り出すアリサに、赤沢の隣の三屋が、

「一昨日の時点で4位だったアンドルー選手が、昨日の内に10勝あげたようですね。元々、先生とアンドルー選手は僅差で競いあつてたわけですし、一桁台の差で順位変動が起こつても、不思議じやないですよ」

「今朝の更新で変わつてたのか！？くそ！余裕持つて弁当なぞ作る

からいくつなる…」

悶え叫ぶアリサに、ああ、と顔を上げた藤山が付け足す。

「先生、アンドルーみたいにプロ稼業に専念してるわけじゃないっすからねえ。むしろ塾講師や内職しながら、対等に渡り合えてるのが凄いくらい」

「む…、そうか」

少し得意氣な笑みを見せたアリサは、気をとり直したのか、

「話が逸れたな。 2103年からだつたか…。藤山、続けてくれ

「あいや」

同年

バトルスピリッツ、プロハイランカーリーグ発足。

「先生、年いくつですか？」

「なつ！？」

と藤山の言葉に反応したのは最後列の櫻井だ。

元来、女性の年齢やBWHを尋ねるのは失礼にあたり、それは現代でも変わらない。

櫻井の怒氣を孕んだ視線に気付かず、失礼な藤山は続ける。

「今2136年じゃないですか。先生もう雰囲気が“最古参”みたいな感じだから…。どう見ても小学生、顛履目でも中学生なのに」

最後のは小声でボソリと。

身長178cmの藤山に対し、153cmのアリサ。

アリサの童顔と柔らかそうな銀髪も相まってか、小学生かよくて中学生にしか見えない。

「28だが」

一同から、懷疑の視線が向けられるが、気にせず、

「2124年にプロリーグに入ったんだ。中学校での成績がすごぶる悪くてな。親にも勘当され、行く宛がなかつた私を、今の“レイ・ロレンツオ”の社長がスカウトしてくれたんだ」

一息吐いて、

「『生きたいなら自分で稼げ、私がその道しるべを立ててやる』とな

「さすが、高級ブランドの社長。一般人に吐ける台詞じゃないつすね」

「社長には感謝している。おかげで今まで、生活苦もないしな。と、また話が逸れたか。…まあ復習はこのくらいでいいだろ?」

教卓の上の紙袋を下ろし、最前列の長卓に置く。

「授業だ」

里村夫婦がヨタヨタと立ち上がり、よつよつらせ、と長卓を押す。

教卓から見て左最前列の長卓には椅子を設置していない。

なので、じつして一列目を押すと、合わせり、“充分な空間”が確保される。

アリサが紙袋に手を突っ込み、何かを取り出すと、藤山が、

「しかし、お勉強会に来てるはずなのに、娯楽とまじれ如何」「面白いだらうへー。『いつこう』と、を教える塾があつてもいいじゃないか」

一同からイエスの返答。

詰め込み型より参加型の授業が求められる時代だ。

昨今の流れにそぐわず、彼らも座学より実践、百聞は一見にしかず、アリサの行動に目を輝かせる。

それを見て、アリサの口元もニヤリと笑う。

「では始めようか。バトルスピリッツッ！」

プロローグ～私塾、松風BS塾～（後書き）

～反省会～

アリサ「……おい」

はい、何で「」せんしょ。

アリサ「バトルがないが、大丈夫か？」

大丈夫じゃない、大問題だ。

アリサ「不定期かつ【鈍足】更新だといつのに、1話1バトルにしないでどうする？」

世界観とか紹介したかったんですけど、
プロローグって短いもんじゃない！？

アリサ「まあ…、そうだが…。 次回はちゃんとバトルするんだろ
うな？」

はい！書かせていただきます！誠心誠意書かせていただきます！

アリサ「ならいいんだが…。ちゃんと書けよ？『昨今のバトスピームに乗つてみよつと思つんだが、ここつをどう思つ？』とまで言つていたんだからな」

任せんしゃい！駄文紡いじやつよ！？ じゃあこのくんでキヤフ“名”紹介、言つてみよつー

アリサ「名だけか」

主人公：

松風アリサ（まつかぜ アリサ）

塾生：

藤山虎太朗

久慈重治

久慈重治

三屋充

赤沢治郎

里村佐吉

さとむら さちえ
里村幸枝

さくらい ももか
櫻井百花

プロハイランカー：
アンドルー・セルゲノフ

アリサ「本当に名前だけとはな…」

魅力的でしょ？

アリサ「…決めろ！合体アタック！」

ああ！？飛ばされた！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6561y/>

そうだ。バトスピで食べよう。

2011年11月20日11時28分発行